柄杓山城跡（城山）

山腹一面に桜が咲き誇る桐生屈指の花名所
絶景とともに豊かな自然と深い歴史に触れる

「R高等学校」として新たな門出を迎えた旧桐生女子高校の校舎を横目に北進すると間もなく、左手に頂部の突き出た特異なシルエットの山が目に入る。春には山腹を覆う桜の木々が見事に咲き誇る桐生屈指の花名所でもあるこの山は「柄杓山」（ひしゃくやま）、「城山」（じょうやま）と2つの名で親しまれ、豊かな自然を満喫しつつ手軽に楽しめるハイキングコースとしても人気だ。

城山の名が示すように、この地には戦国の世に山城が築かれていた。南北朝時代の正平5年・観応元年（1350）に桐生の豪族、桐生国綱が構えた柄杓山城（桐生城）は、標高361mの本丸を斗口、二の丸・三の丸を柄とする、その名の通り柄杓型の梯郭構造で、現在も深い堀切や武者屯、郭馬出しなど城跡の全てが完全に残る。

国綱を初代とする桐生氏（後桐生氏）は勢力を強め、その治世は実に10代、223年に及んだが、天正元年（1573）、太田金山城主由良成繁により攻め落とされ桐生氏は滅びる。以後、由良成繁から子の国繁へ城主の座が渡るも、天正18年（1590）に由良氏は領地替えとなり、由良氏2代18年の統治の終焉とともに、柄杓山城は廃城となった。

現在は林道と駐車場が整備され、そこから遊歩道を30分ほど歩むと、城跡を示す記念碑が立つ本丸跡の広場に至る。桐生の地形を巧みに利用した広い城域を整備し、要害堅固を誇ったとされる柄杓山城。時を経て市民の憩いの場となった本丸跡から眼下に見渡す桐生市街へ開けた眺望が、この地を拠点に据えた先人たちの知見を物語っている。

【柄杓山城跡（城山）】
●住所／桐生市梅田町１丁目地内